

埋蔵文化財の保存処理(昭和60年度)

服部 哲 則

昭和60年4月から始まった保存処理受託事業の、一年を振り返ってその成果を報告したい。

1. 経過

- 昭和60年3月 保存処理事業要項作成
 その他関係書類の書式作成
 新本部へ移転
- 4月 保存処理室設営
 既存器具、設備の点検・修理、
 PEG含浸槽、大型恒温乾燥器の
 搬入
- 5月 奈良文化財研究所で研修
- 6月 保存処理作業開始

2. 事務手続の流れ

表1のとおり

3. 各種遺物の保存処理法 (60年度成果より)

- ①鉄製品—アクリル樹脂(NAD-10)溶液減圧含浸法 12時間以上 3回
- ②青銅製品—ベンゾトリアゾール混入アクリル樹脂パラロイト(B72)溶液減圧含浸法 3時間以上 1回
- ③炭化材 } アクリル樹脂(B72)溶液減圧
 骨角製品(乾燥) } 含浸法 3時間以上 1回
 粗製土器 }
- ④水浸木製品(大型)—PEG含浸法
 20%から10%ずつ濃度を上げ100%まで 1年間以上
 鉄斧木芯(水浸)—アルコール・キシレン・樹脂法
 12工程 各2週間

4. 成果について

昭和60年度保存処理業務の成果は表2のとおり。ただし、千葉市とされている部分については、セ

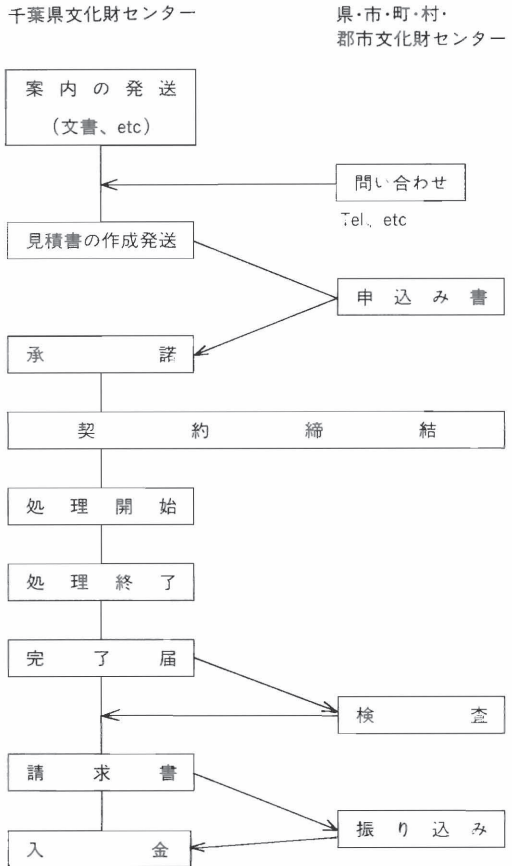


表1

ンター内部の遺物であり、受託事業ではない。

付. 鉄器保存処理作業留意点

錆び取り

1. 錆取りの前

鉄器表面を十分に観察し、木質・布目等については、その所在を処理カードに記入する。またB72を塗布して保護する。

2. 土・砂の除去。

原則的には、エアブラシを用いる。しかし接

出土市町村	遺 跡 名	遺 物
四街道市	御 山 - 1	飾大刀
千 葉 市	根 崎	剣・刀子・古銭
	六 通 金 山	大刀・鐔・鎌・釘
	服 部	鉄斧（木芯付）・木杭・梯
市 原 市	稲 荷 台	大刀・鎌・刀装具
	持 塚 2号	大刀
	// 3号	大刀
	// 4号	大刀・剣・鉞・針・刀子・斧
	東 間 部 多	大刀・鎌
	東 向 原	大刀・鎌
	山 倉 1号	大刀・絞金具・鎌
	西 谷	大刀・小刀・轡・帯金具
	根 田 1号	大刀・轡・絞金具・留金具・鋏・鋤
	諏 訪 台	大刀・金銅装飾大刀・小刀・金銅装飾鉞・石突・轡・両頭金具・絞金具 タガネ状鉄器
成 田 市	天王船塚37号	大刀
	竜角寺101号	小刀・轡・鎌・辻金具・くさり
	大 袋	鐔（象嵌有）
木 更 津 市	花 山	鋤先・斧・絞金具・鎌・刀子・鈴鐘車
	俵ヶ谷4号	銅鏡・銅釧・銅鉢・銅指輪
袖ヶ浦町	東 那 台	鋤先
	永 吉 台	鎌
	西 ノ 窪	大刀・小刀・鎌・手鎌・鋤先・釣針
大網白里町	ミツホ横穴	鎌・釘
下 総 町	大 日 山 1号	剣
	名木木挽崎 1	大刀・小刀
	// 4	大刀
	// 5	大刀
成 東 町	不 明	小刀・鎌・木質銷・鉄斧・刀子

表2

着性の強い土・砂の粒子については、グラインダーの軸付砥石を用いて削り取り、さらにエアブラシをかけて除去する。

3. コブ錆の除去

形状から大きくはみ出したコブ錆は、ダイヤモンドディスクを用いて切り取る。しかし下記の場合は、そのまま残す。

- 1) 布目・木質等の付着のあるもの。
- 2) そのコブ錆を除去すると、遺物が大きく欠損してしまうもの。

3) コブ錆の表面が遺物のオリジナルな面のもちあがったものである場合。

4) コブ錆び自身が、ハガネ質で切り取りに困難を極めるもの。

5) その他、調査員が指示するもの。

4. コブ錆の保存

切り取ったコブ錆は、のちの分析等に使用できるようビニール袋に入れ、遺物番号のわかるようにしておく。



処 理 前



処 理 後



直刀保存処理例

つや消し

1. 3回の減圧含浸のそれぞれの後、ソルベントナフサで拭い、NAD-10の滴などが付かないようにする。
2. 乾燥後、ガーゼの糸、網の後の有無を点検し、あればそれを除去する。
3. 鉄器表面にアセトンを筆で塗り、それをタンポで軽く叩くように拭き取る。
4. これらの工程の際は、有機溶剤が部屋に充満しないよう、ドア・窓を開け、換気扇をつける。必要であれば、扇風機を用いる。

接合・強化

1. 縦に割れている箇所は、^背にボンドールをつめ漏れないようにしてから、刃側からアラルダイトGY1252を流し込み、すき間を埋める。
2. 接合は、細かい物を大きい物に付けるところから始め、おおよそ二～三分割のまとまりになるように進めていく。
それぞれの接合後、乾燥したら必要に応じて、

ボンドールで補填する。

接合面がしっかりしていない場合などは、接合時にボンドールを用いて、面を整える。

3. 最後に、ビュレット台等を用いて、アラルダイトラピッドで二～三つの部分を接合する。

接合が、ラピッドではもたない場合は、ステンレスの芯を入れることもある。

4. 接合後、ボンドールで細かな補填、または復元を行う。

ボンドールで補填の際は、遺物表面より高く盛り上がらないようにする。依頼者によっては補填箇所を明確にするため一段下げることもある。

保管

仕上がった遺物は、水分を含みやすい紙や綿に直接触れぬよう、ビニール袋かアクリルケースにシリカゲルと共に入れ、密閉する。

(研究部)